

## 王清任の補気観 ——李東垣との比較から——

越智 秀一

順天堂大学医学部医史学研究室

王清任（1768～1831）がその死の前年に著した『医林改錯』は、公共墓地での死体観察にもとづく人体観を旧来の五臓六腑図と照合して、誤りを正そうとした書物として知られている。その人体観は、ヨーロッパ伝来の解剖学の水準に照らすと多くの誤りが見られるが、いっぽうでその観察の結果にもとづいて彼が創案した多くの処方、現代においても临床上、有意義な効果が見られることを多くの研究者が指摘している。

『医林改錯』において、王清任は多くの症状の背後に瘀血の存在を指摘し、活血化瘀によって治癒もたらされると説いた。「瘧毒吐瀉轉筋」に対しての処方である解毒活血湯、急救回陽湯、半身不随や萎症さらに中風の後遺症や小児麻痺の後遺症に用いられる補陽還五湯などは特に名方として知られており、その他、通窮活血湯、血府逐瘀湯、隔下逐瘀湯、少腹逐瘀湯、通経逐瘀湯、会厭逐瘀湯、舌下逐瘀湯などの活血化瘀薬を考案している。

王清任が、活血とともに補気を重視していることも研究者たちの指摘するところである。中国では2000年に『王清任研究集成』の編集が始まり、最新の研究を踏まえたテキスト『医林改錯識要』が2002年に出版されているが、温長路は「前言」のなかで「医療実践を通して気虚瘀血学説と一連の活血化瘀の処方を創立したのは、王清任の一生において、最も有意義な貢献である」と述べ、同様の評価が各所に見られる。

気虚を補うのが「補気」であり補気のために、王清任は黄耆を多用した。『識要』に付された「薬法総論」では、「『医林改錯』は、黄耆の使用において、古今の黄耆の応用の集大成であり、黄耆の使用における規矩と同時に柔軟で巧妙な使い方を示している」と指摘されている。

補気・補益剤としての黄耆を人参と組み合わせて処方の核としたのは、後世方の李東垣（1180～1250）であるが、彼は喜、怒、憂、恐などの異常な感情によって心火が助長され、火が勝つと土に乗じて元気が消耗する。つまり、「喜怒悲憂恐」によって胃の気が傷（やぶ）られ、過労と暴食がこれに続くとも元気が傷られるとし、精神的原因が脾胃の発病過程で先導的な役割を果たすと考えた。李東垣の補気の発想の背景には、このような心身相関的な視点がある。

これに対し、王清任は多くの精神症状に対しては、いちように活血を重視している。彼が黄耆を多用するのは、中風に伴う半身不随、小児の伝染病の後の吐瀉やひきつけ、激症天然痘の回復過程、産後のひきつけや人事不省、難産、四肢麻痺、脱肛などの際の体力の向上に際してである。

陳可冀ほか編で1987年に出版された『血瘀と活血化瘀の研究』（上海科学技術出版社）においては、王清任は「補気を重視する点では、李東垣を超えている部分がある」とされているが、李東垣の五行説にもとづく心身相関的な病理観から発した補気の発想と比較すると、王清任の補気の捉え方は身体機能的な色彩が濃いと言えるであろう。

この補気観の相違には、王清任が不完全ながらも解剖学的な人体観察を経て、旧来の五臓六腑と情動の関係を説く思想から離れた病理観を打ち出したことが背景にあると考えられる。その結果、王清任は、李東垣の補気概念から心理的側面を拭い去り、純身体的に捉えそれに活血を組み合わせることで、補気剤としての黄耆の使用法を拡充したのである。